

CONTENTS

TOPICS

- 1 センター長就任挨拶
- 2 トップセミナー〈ダイバーシティが工学の未来を拓く〉
- 3 メンター研修
- 4 女性研究者・技術者の会 ランチミーティング
- 5 ワークライフバランスセミナー〈支えあう職場環境をめざして〉

- 6 名古屋工業大学 男女共同参画週間

REPORT

育児支援制度 利用者の声

COLUMN

ワーク・ライフ・アンバランス

TOPIC 1 センター長就任挨拶

名古屋工業大学ダイバーシティ推進センターは、前身である男女共同参画推進センターの2014年の発足以来、鶴飼裕之学長、前センター長の藤岡伸子学長特別補佐のリーダーシップの下、女性研究者支援を進め、人種・国籍・性別・文化・宗教などを問わずに、有能な人材が活躍できる研究環境の構築に積極的に取り組んでまいりました。

新センター長に就任するにあたって、私は、本学の産学連携の豊富な実績を活かし、名工大の女性教員・女性研究者の地域連携・共同研究・共同開発を一層推進していきたいと考えております。そのために、現事業、文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」における次世代育成、女性研究者支援を主軸とする取組を充実させ、工学分野の女性研究者の裾野拡大を図るとともに、女性研究者・女子学生にとって安全で快適な研究環境作りと、ハラスメント予防に向けた取組を継続的に推進していきます。

本年7月には、当センターは愛知県知事より「あいち女性活躍プロモーションリーダー」を拝命いたしました。地域の女性活躍を牽引する立場として、決意を新たにセンター職員一同邁進してまいります。今後ともみなさまのお力添えをよろしくお願い申し上げます。

ダイバーシティ推進センター長 吳 松竹



TOPIC 2 トップセミナー〈ダイバーシティが工学の未来を拓く〉

2019年5月15日、トップセミナー「ダイバーシティが工学の未来を拓く」を開催しました。本セミナーは、ダイバーシティ研究環境の実現に向けた意識啓発を目的とするもので、学長はじめ本学役員、全専攻・領域長40名が参加しました。

講師には、電気通信大学副学長（研究担当）兼男女共同参画・ダイバーシティ戦略室長の由良憲二氏をお迎えして「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」事業において進められている取組と成果についてお話を伺いました。電気通信大学では、NTT先端技術研究所、津田塾女子大学と3機関で連携し、豊かなコミュニケーション社会を実現する「コミュニケーション・フロンティア」に寄与する女性研究リーダーの育成を目指し、研究力向上、共同研究の支援によるネットワーク構築を進めています。講演では、ライフイベント期の女性研究者の研究力向上と意識啓発を図る取組として、子ども同伴で出席可能な3機関共同の研究会やキャリアデザインワークショップの開催、大学内保育所、研究支援員の配置によるサポートが紹介されました。また、併せて実施されている工学分野を専攻する女子学生の裾野拡大のための取組「匠ガールプロジェクト」の内容についても詳しくお話いただきました。



名古屋工業大学ダイバーシティ推進センター

TOPIC 3 メンター研修

2019年3月11日、名古屋工業大学女性研究者メンター制度「第2回メンター研修」を開催しました。本制度は、キャリアアップを目指す女性研究者に、キャリア形成にかかわるさまざまな疑問や悩みを相談できる体制を提供することを通して、女性研究者の育成を図ることを目的とするものです。

今回は、講師に名古屋大学高等教育研究センター准教授中島英博先生をお迎えし、大学におけるメンタリングの論点と10年以上にわたる名古屋大学におけるメンター制度の実践についてお話いただきました。メンティのニーズに寄り添う名古屋大学のメンター制度の実際とともに、メンターが備えるべき4つの質問をする力とコーチングの基本的な考え方など、実践的なメンタリングの技法を学びました。

研修は、受講者との対話を引き出す形で進められ、メンター同士の意見交換や事例の共有にもつながる貴重な機会となりました。



TOPIC 4 女性研究者・技術者の会 ランチミーティング

2019年6月21日、i-cafeにて、2019年度第1回目の「名古屋工業大学女性研究者・技術者の会」ランチミーティングを開催しました。今回は学長と11名の女性研究者・技術者が参加しました。

呉松竹ダイバーシティ推進センター長の挨拶の後、それぞれのテーブルで歓談を楽しみました。新任の女性教員や博士後期課程の大学院生の初参加もあり、研究職・研究支援職のロールモデルの示し方や鶴桜会の交流会など、ダイバーシティ推進のための取組についての意見交換が各テーブルで和やかながらも活発に行われていました。



TOPIC 5 ワークライフバランスセミナー 〈支えあう職場環境をめざして〉

技術部とダイバーシティ推進センターの共催により、2019年3月15日に「ワークライフバランスセミナー～支えあう職場環境をめざして～」を開催しました。

セミナーは午前・午後の2部制で行い、午前は一般社団法人ワークライフバランス東海の垣内芳文氏より「抱え込まず支え合うチーム（職場）づくりのためのコミュニケーションを考える」と題して、お互いを理解するためのコミュニケーションの必要性についてお話いただきました。午後は、環境、スキルアップ、自分、家族というテーマでグループディスカッションを行いました。

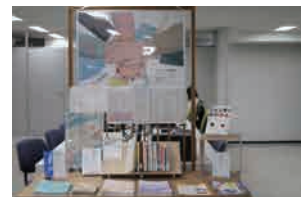


TOPIC 6 名古屋工業大学 男女共同参画週間

毎年6月23日から6月29日は「男女共同参画週間」（内閣府）です。

ダイバーシティ推進センターでは、本学における男女共同参画社会の推進を図るため、学生及び教職員を対象に、附属図書館にて「名古屋工業大学男女共同参画週間」（6月21日～28日）を開催しました。

附属図書館の展示コーナーに、ポスターを掲示し、センターパンフレットやロールモデル集とi-cafeにある蔵書のご案内を設置するとともに、ジェンダー・ダイバーシティ関連図書を展示しました。



REPORT 育児支援制度 利用者の声

柴野 翼さん (人事課主任)

2018年4月から2019年3月までの1年間の育児休業についてお話を伺いました。



「育休はかけがえのない、特別な時間でした」

育休取得を決心するまで

2018年6月の第二子誕生に合わせて、昨年4月から1年間の育児休業を取りました。一人目が乳児の時には、私は「仕事があるから」と夜中に起きて子どもの面倒を見ることはなかったのですが、妻と二人目が欲しいね、と話し合っていた時に「産後や授乳の時期の負担を軽減してほしい、もっと協力してほしい」という妻の思いを聞きました。その頃は子どもが起きている時間に帰れるような勤務状況ではなかったため、それならば育休を取って夫婦で協力して育児をしていこうと考えました。

休みに入る3カ月前に上司に相談をして「取ったらいいよ」と快諾していただきました。職場の皆さんも、「時代も後押ししてるものだし、取ったらいいんじゃないか」と背中を押してくださいました。

育休に入って

妻が臨月に差し掛かる頃に休みに入り、1年間の夫婦そろっての育休生活が始まりました。上の子が2歳の男の子で元気に動き回っているため、私がずっと面倒を見るようになりました。朝食を作って、日中は散歩に連れ出したり、トヨタ産業記念館や遊園地に二人で行ったりとか。母親は常に家にいるので、二人で出かけるのと長男にとっては私だけが親でするので頼ってくれて、それまでない感覚がその時はありました。この時に長男にとって一番の存在になれたっていうのが自分にはとてもよい経験になりました。

心境の変化

休みに入って3カ月くらい経つ頃には仕事のことが気になるようになりました。次の3月に向けてどうなるんだろう、ブランクはどうカバーするのか、異動はあるだろうか。社会とのつながりもなく、一日に話す相手は家族だけという今までに経験したことのない状況だったなと思います。ただ、自分を見直す機会にはなったと思います。孤独感もあったけれど限られた期間だということもあり、乗り越えられました。

振り返って思うこと

妻は、育休中は今までで一番楽しい時間が過ごせたと言っています。その後の子育てを夫と一緒にできるようにトレーニング期間でもあったと解釈しているようです。育休を経て、妻にとって私は、子どもが体調を崩したときに安心して任せられる存在になったそうです。そういう意味では、妻の仕事復帰や今後のキャリア形成の後押しができたと感じています。

育休で子どもと過ごした日々は、かけがえのない、何とも違う時間です。大変なことはあっても特別な時間だったと思います。今後、子どもが親離れていく時が来ると思うので、そういう時にも、この1年間のことを思い出して親として頑張れるんじゃないかなと思っています。



電気・機械工学専攻 加藤正史先生の

ワーク・ライフ・アンバランス

Work Life

Unbalance



加藤 正史

1998年 名古屋工業大学卒
2003年 同大学大学院修了 博士(工学)
2003年 名古屋工業大学 助手
2008年～現在 名古屋工業大学 准教授(その間リトアニア国
ビリニュス大研究員、名古屋大学客員准教授 兼任)

第9回 子供の個人情報

IT社会

デジタル機器の進展と、インターネット環境が普及した現在のIT社会では、誰でも容易にデジタルの写真・動画データを作製し、それを複数で共有できます。便利な反面、個人情報を守るという点では難しい世の中になっています。大人は本人の考え方と、データを共有する他人との信頼を基に、自己責任で個人情報を守ることになります。しかしながら子供の場合、その個人情報を保護者が守るしかありません。数年ごとに新たなソーシャルネットワークサービスやメッセージングアプリが登場する現在、大人が本人の情報すら制御することが困難ですから、子供の情報を守るのは容易ではありません。

個人情報の捉え方

とはいえ、個人情報の捉え方は人それぞれです。情報公開に積極的な人も消極的な人もいます。大学教員は名前や顔を出すのも仕事なので、積極的な人が比較的多いでしょう。一般の方でもウェブに動画を公開している方もいますし、自分の子供を動画に出している方もいます。ただし子供の場合、公開された情報により、本人が不利益を受ける可能性もありますし、将来的に本人が心理的にどのように捉えるかはわかりません。実際、自分の情報を他人以上にさらけ出している芸能人も、子供の情報に関しては慎重な人が多いようです。意図的であるかないかに関わらず、一度ウェブ上に情報が流出してしまったら、それを完全に消すことはほぼ不可能です。公開された情報により、将来子供に不利益が出てくる可能性を保護者が考えておくべきでしょう。



情報を守る時代

アメリカでは児童オンラインプライバシー保護法(Children's Online Privacy Protection Act [1])という法律が施行され、一方我が国でも個人情報保護法が施行されています。しかしながら、ウェブを使う上である意味欠かせないGoogleは、我々が利用した情報をほぼ全て蓄積しています。LINEも日常の連絡に便利ですが、オプトアウト(設定変更)しない限り、ウェブサイトへの訪問履歴などがLINE社に送信されます。これらは現在の代表的な例ですが、我々が意識せずとも個人情報はIT企業などに利用されていますし、個人情報を利用しようとする企業は今後も後を絶たないでしょう。大人の個人情報も当然ですが、将来子供が不利益を被らないように、子供の個人情報にも気をつけなければならない時代なのだと考えています。

[1] https://en.wikipedia.org/wiki/Children%27s_Online_Privacy_Protection_Act

発行

2019年7月発行

名古屋工業大学ダイバーシティ推進センター

〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町

TEL | 052-735-5121, 052-735-5279

E-MAIL | diversity-crew@adm.nitech.ac.jp

URL | <http://www.nitech.ac.jp/diversity/>

文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(特色型)」